

長男として、父親の思い出

岡村，穰
名古屋市立大学：教授

<https://doi.org/10.15017/1650642>

出版情報：中国文学論集. 44, pp.71-81, 2015-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

長男として、父親の思い出

はじめに

『中国文学論集』の創刊から永年お世話になっておりました岡村繁は、平成二十六年（二〇一四）十二月二十六日午前五時、福岡市東区の自宅の居間にて就寝中に、九十二歳で老衰のために亡くなりました。母からの話では、前日の夕刻まで書齋で好きな本を読んで過ごしており、夕食後、いつものようにテレビや雑誌を見ながら横になって過ごしていたとのことでした。夜中にいつものようにトイレに起きた際に、「胸のあたりが痛い」と言っていたそうですが、早朝、母が目覚めた際には息がありませんでした。早速、母の様子がおかしいことに気づいた近所の方々が駆けつけて、また、近所の掛かりつけのお医者さんも酸素吸入器などを持って駆けつけてくれたそうですが、蘇生を施す術もなく、天寿を全うしたそうです。死亡診断書には心筋梗塞の痕跡ありとのことでした。

母は早速、名古屋にいる私に電話したそうですが、就寝中で応答がなく、東京にいる姉に連絡できたそうです。私は、朝六時頃に姉からの携帯電話への連絡で知りました。母に電話したところ、「人間って、こんなに簡単に亡くなるのだね。」との話で、苦しむこともない大往生だったそうです。年末の帰省客で超満員の中、ネットでようやく見つけた常滑市にある中部国際空港からの午後の便で福岡に帰りました。昔から通い慣れた香椎参道にあった香椎郵便局の建物を改装して造られた葬儀社の香椎典礼会館にて、翌二十七日十九時から通夜、二十八日十一時から告別式を行いました。竹村先生、静永先生、海村先生はじめ九州大学及び久留米大学の関係者の方々、自宅の近所の方々など、年末のお忙しい中を、多くの皆様にお見送りに来ていただき、感謝しております。この場を借りてお礼

追悼 岡村 繁先生

申し上げます。

その後、平成二十七年（二〇一五）二月二十一日に東区千早にある浄土宗一心寺にて四十九日の法要、三月一日に滋賀県甲賀市甲賀町油日にある菩提寺の浄土宗極楽寺にて大雨の中で親戚が集まって納骨。同二十九日に極楽寺にある岡村家先祖代々の墓の墓碑への加筆が済んで納入したとの報告があり、一連の儀礼を終えることができました。甲賀の菩提寺へは、名古屋市守山区大森にある私の自宅から車で、東名阪自動車道と新名神自動車道を使って渋滞がなければ一時間半で行くことができます。三十五年前の昭和五十五年（一九八〇）に大学院を終えて名古屋へ赴任した頃から、年数回ですが父の代わりに先祖代々の墓参りには行かせていただいており、長男としての役目は果たしているかなと思っています。

三月に入って、父の遺言に従って、蔵書の久留米大学への移転が決まり、目録作りなど、諸先生方や中国文学研究室の皆様には大変お世話になりました。六月五日には、九大の奥野先生から目録中の書籍の総冊数が一万三千冊余になったとのご連絡をいただきました。その後、静永先生の「初盆までには蔵書を送り出す」とのご配慮もあり、七月二十九日に運送業者によって久留米大学へ搬送されました。ほぼ一年後の平成二十九年には、お世話になった久留米大学文学部が創立二十周年で、その記念事業として蔵書が「岡村文庫」として一括保管されることになりました。私が大学院農学研究科に入った年に、池田数好第十四代九大総長が退任の際に中央図書館に寄贈された千冊の単行本でも書棚に並んだ量は凄まじく、その十数倍の量の本が久留米大学で収蔵されることになり、関係者の皆様にはご迷惑をおかけします。

「父の遺言に従って」と書きましたが、父はひとつの論文を書き終えると、精根尽き果てるのかいつも風邪を引いて寝込んでしまい、その度毎に「お父さんはもう死ぬから」と子供二人を枕元と呼んで「本を散逸させてはいけない」と遺言するのがいつものパターンでした。父が九大に勤めていた頃は、タバコを一日に百本以上吸うヘビースモーカーで、多忙を理由に病院に検査にも行かず、「俺は太く短く生きる」と豪語していたので、多分父が早く亡くなると思っていました。その後、両親とも高齢化して、もし母が先に亡くなって父を名古屋か東京に引き取る事になったら、父の世話だけでも大変なのに「本をどうしよう？」というのが私たち姉弟の会話の話題になった時期が

ありました。父と本を切り離したらどうなる？ どう考えても良いアイデアが出ませんでした。結局、その事態になつてから考えようという結論になりました。

岡村家の系譜



写真① 生家の裏庭で

父は岡村家の長男として、大正十一年（一九二二）に祖父岡村浜之助と祖母カツの長男として鈴鹿山脈西麓の滋賀県甲賀郡油日村（当時）で生まれました。岡村家の歴史は浅く、大正四年（一九一五）に曾祖母とめが、嫁ぎ先から出戻つた際に、養女きぬを連れて分家したのが始まりです。今年で岡村家百周年だったのですね。その養女きぬに婿養子として大正五年（一九一六）に来たのが祖父浜之助でした。養女きぬは、大正七年（一九一八）に不倫

関係に悩んで井戸に身を投げて自殺した、大変美しい女性だったと聞いております。祖父浜之助は明治二十二年（一八八九）生まれの三男で、小学四年終了時から甲賀の薬売りの行商をしており、仲間との東北地方への行商の際に、仲間が売上金を博打などで無くしてしまい、一文無しになって帰郷したところで婿養子になったとのこと。祖母カツは明治三十二年（一八九九）生まれで、三重県の鳥羽高等女学校を卒業後、大正九年（一九二〇）に祖父浜之助と結婚しました。父の幼少期は、大正十五年（一九二六）に亡くなった曾祖母とめに大変可愛がられて育つたと話していました。

父には、二歳年下の弟金吾、四歳年下の妹静江、六歳年下の妹三千代、八歳年下の妹敏江、それに九歳年下の妹栄の一弟四妹がいました。が、妹静江は一歳で、妹三千代は五歳で、妹敏江は一か月でそれぞれ亡くなっております。写真①は、父が滋賀県師範学校、弟金吾が旧制

神崎郡立神崎商業学校の生徒だった頃に撮った写真で、内三人の女の子は別人で、現在も八十四歳で存命中の妹栄がどれかは不明です。栄養状態も悪かったのでしょうか、六歳年下の妹三千代が五歳で疫病に罹って亡くなった際は悲惨で、ゴム製の水枕を食いちぎって短時間で死んでいったと話してありました。写真①の背景は油日村の生家の風呂場の窓で、その横に生活用の井戸のバケツの釣瓶があり、当時は汲み取り式のトイレも近くにあったところで、衛生環境も良くなかったと言っております。

滋賀県甲賀郡油日小学校から広島文理科大学へ

幼少期からについては、父の愛読稿「東方学、第二百二十四輯、学問の思い出」に詳しく書かれておりますが、油日尋常小学校五・六年と油日高等小学校二年間の担任に武田という少し変わり者の先生がおられて、父の学習能力を高く評価してくれて、祖父母に上の学校へ行くように強く勧めたそうです。祖父浜之助は小学校の四年生までしか学歴はありませんでしたが、売薬の行商で全国を回って視野が広く、読み書きもできました。祖母カツは、当時としては珍しく高等女学校を卒業しておりました。周囲の親戚たちが、師範学校など行かなくても村の青年学校へ行けば小学校の代用教員の資格が簡単に取れたと言った中で、祖父母は父の勉強の継続を勧めたようです。猛勉強の甲斐があつて、滋賀県師範学校に主席で合格できました。山奥の田舎の小学校出身者が主席になった？とのことで、その後の油日小学校には問い合わせや視察が続いたようです。一方、同じ油日村出身の母の三人の兄の一人は、父のあまりの猛勉強の痕跡を見て、中等学校に進学するのを諦めたそうです。

滋賀県師範学校は五年間の全寮制で、初めて琵琶湖の白波を見たときは魚が飛び跳ねていると思ったそうです。成績が一番である限り、学費免除で奨学金も受けられるので、比較おろしの吹く寒い寮内の学習室で、旺文社の参考書を使って必死に勉強したそうです。スポーツ万能で字も絵も上手なので、いつかは小学校の校長先生という進路もあつたのですが、師範学校の卒業が昭和十七年（一九四二）三月で、前年十二月の真珠湾攻撃で太平洋戦争が始まっており、学費が安くて兵役免除の広島高等師範学校への現役合格を目指して、猛勉強したようです。



写真② 竜池小での担任

広島文理科大学附置広島高等師範学校へも高倍率の中を主席で入学し、学費免除で助かったそうです。高師在学中には、戦争も激しさを増し、勤労働員で愛知県刈谷市の溶鉱炉で働いたり、滋賀県甲賀郡の竜池小学校で教鞭をとったそうです(写真②)。母の母校である滋賀県立水口高等学校へも教員として行っており、その際に油日小学校の父の同級生の妹である母たつ子と出会っていたのかどうかは不明です。卒業は半年繰り上げの昭和十九年(一九四四)九月。広島文理科大学に入学後、昭和二十年(一九四五)二月に文科系学生に対する学徒出陣が開始されています。その後、熊本にある陸軍予備士官学校に配属され、熊本城の見える演習場での厳しい訓練の後、昭和二十年(一九四五)七月には、原爆前の広島に立ち寄った後、本土防衛のために岡山県津山市に予備士官学校移転とともに移動して、終戦を迎えたそうです。原爆投下前に「岡村死ぬなよ」と言っていた理系の同級生が原爆で亡くなったり、油日小学校の男子クラスの同級生の三分の一が戦病死したり、先の戦争については多くは語りませんでした。悲惨な状況でも小学校クラスの三分の二は生き残ったということが、子供心に驚きでした。

広島から明石・名古屋・仙台を経て、博多へ

太平洋戦争が終わって、広島文理科大学を卒業して無給の副手になり、その後有給の助手になって、昭和二十二年(一九四七)に同郷の母たつ子と結婚して、広島市中区基町(現在)の当時としては立派な市営住宅で暮らし始めました(写真③)。昭和二十四年(一九四九)に姉容子が生まれ、昭和二十六年(一九五一)に私穰ひたかが生まれまし



写真③ 広島市基町の家



写真④ 斯波先生ご一家と



写真⑤ 星陵高校の生徒と

た。原爆ドームのすぐ近くで、よく遊びに行つたそうです。家の裏に畑があり、サツマイモを植えたら巨大なイモができて、放射能の影響か？と疑つたそうで、後年、私穰が農学部に入つて、焦土の木灰のカリ成分が根菜によく効くと教わつて疑問が解けました。また、子どもへの放射能の影響がないか、米軍のGHQが度々調査に来たそうです。広島文理科大学の斯波六郎先生には、漢文学の厳しい指導を受けたようで、「若いときには、一流の教官から厳しい指導を受けるのが良い」というのが口癖でした(写真④)。それでも研究上の討論などで斯波先生と論戦となり、結局、広島高等師範学校の先輩の招きもあって、

神戸市にある兵庫県立星陵高等学校の国語の教員に転職することになりました(写真⑤)。後年、私が名古屋に赴任する際の「教授会では、一言発言したら、一人敵が増えると思いなさい。」との忠告の裏には、若い頃の反省があつたのかも知れません。

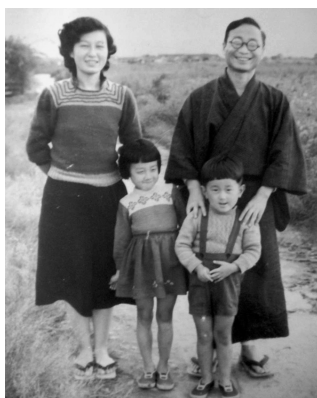
父にとつて、高校の教諭時代は結構充実していたようで、神戸仕込みのオシャレな生徒たちとの交流や、得意の鉄棒の演技披露(写真⑥)や、週一回の京都大学人文科学研究所での勉強や、英語の原書をスラスラと読む高校の先生方のレベ



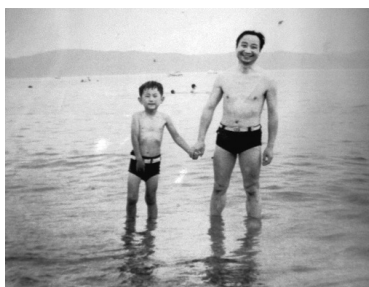
写真⑦ 星陵高校職員室（左斜め上）



写真⑥ 星陵高校で鉄棒



写真⑧ 明石の家の前



写真⑨ 明石海岸での海水浴

⑨)。当時の夏休みの楽しみがもう一つ、お盆の法事で西明石駅から省

所でしたが、人骨とは明石原人の骨で、考古学的に重要な場所であったことを後になって知りました。背景は明石海峡と淡路島です（写真⑧）。また、夏休みには、水泳も得意な父は近所の子供たちも連れて、遠浅の明石海岸での海水浴を楽しみました。明石海岸は崖になっていて、人骨が出るとの話があつて子供には若干怖い場所との話があつて子供には若干怖い場所であった。当時の夏休みの楽しみがもう一つ、お盆の法事で西明石駅から省

ルの高さ、幅広い時代の漢文が掲載された教科書、教育委員会が用意した漢文研修の講師を徹底的に論破したり、研究に没頭できる夏休みがあったり。私も高校の職員室に連れて行ってもらったり、時には宿直室に泊まったりもしました（写真⑦）。給料もほどほどで、畑や原っぱが広がる西明石の市営住宅の一軒家に住むことが出来ました。地平線に落ちる真っ赤な夕日や淡路島の灯台の灯りが印象的でした。当時の家族の服装は全て母の手縫いで、着物の染め替えや毛糸の編み直しをてきぱきとする母の姿が印象的でした（写真⑧）。また、夏休みには、水泳も得意な父は近所の子供たちも連れて、遠浅の明石海岸での海水浴を楽しみました。明石海岸は崖になっていて、人骨が出るとの話があつて子供には若干怖い場所



写真⑩ 浜之助爺ちゃん

の住宅は一か月水に浸かりました。幸い鉄筋コンクリート造の県営住宅の二階に住んでおり、水没の被害は免れました。水害の中でも、救援物資をもらいに行ったり、ドラム缶で作った筏を竹竿で操縦したり、父は結構楽しそうにしておりました。昭和三十六年（一九六一）には、油紙に鉄筆で彫り込んだ原稿を謄写版で一枚ずつローラーをかけて印刷した博士論文が完成しました。翌年には名古屋大学文学部が東山キャンパスに移転し、同時期に建設された法学部や経済学部の建物はオシャレで、文学部の経済力との差を見せつけられました（写真⑩）。その年、東京の文部省（当時）への出張手当が出たとのことで、私を東京に連れて行ってくれました。初めての東京や銀座の二家パーラーなどテレビでしか見られなかった珍しい体験ができました。帰

線（現JR）に乗って、京都で乗り換えて油日の祖父母がいる父の実家に行くことでした。祖父浜之助は当時、油日小学校の用務員をしておりました。父は何故か子供には「爺さんは校長先生」だと言いくるめており、私も「田舎の校長先生はお茶くみもするんだ」と信じ切っておりました。その祖父浜之助も昭和三十三年（一九五八）に七十歳で他界しました（写真⑩）。

その一年後、名古屋大学文学部の助手への赴任が決まりました。職場は名古屋城内の木造二階建て校舎、住居は名古屋市南区竜宮町でした。西明石駅から省線を三宮駅で「準急比叡」に乗り換えて、泣く泣く名古屋へ向かいました。そのままでも将来は校長にはなれるのに。

今は厳禁ですが父兄からの贈答品の激減も残念でした。名古屋に赴任した年の九月に伊勢湾台風に襲われて、南区竜宮町



写真⑪ 名大豊田講堂（1962年）



写真⑫ 皇居前にて



写真⑬ 東北大川内キャンパス

路は新宿から中央本線でした。周りがブドウ畑だらけの甲府駅で買った駅弁のコメの不味かったこと、塩尻駅で乗り換えて下った沿線は板屋根に大きな石を積んだ貧相な家ばかりであったことなど、今では想像もできない景色が車窓から見えました(写真⑫)。昭和三十九年(一九六四)一月に父は単身赴任で仙台に行き、同月末、長年脳梗塞で寝たきりになって名古屋で同居していた祖母カツが六十五歳で亡くなりました。姉容子の高校入試に合わせてその年三月には、新幹線が準備中の名古屋駅から「準急東海」に乗って、東京・上野駅からは初めての特急「はつかり」に乗って仙台に向かいました。上野駅からまっすぐ北上する東北本線が福島県に入ると雪がちらつき始めて、大変心細かったのを覚えています。

仙台での三年間は、大変充実していたように感じます。東北大学教養部の研究室が自宅の公務員宿舍から徒歩三分ほどで、每晚姉弟で夕餉を告げに迎えに行きました。文学部には伊賀出身の金谷治先生らがおられ、発表会などに参加したり、当時熊本の永青文庫から「敦煌本文選注」が公開されると即時に研究成果を論文発表したりしていました。春は五月頃に一斉に花が咲き始めて、秋は絵に描いたような紅葉の美しさでしたが、冬は寒かったです。石炭ストーブを体験したのも仙台での三年間だけでした(写真⑬)。



写真⑭ 九大教授昇任後の卒業式

昭和四十一年（一九六六）十月に、目加田誠先生のお招きで九州文学部の助教授に単身赴任しました。家族は翌年三月、姉容子の大学入試と私穰の高校入試に併せて博多に転居しました。仙台から引越し荷物を国鉄（当時）コンテナ二個で運び出し、本が一個半で家財は半分という構成でした。新幹線は既に岡山まで通じており、岡山から延々と列車に乗って時刻博多駅に着きました。博多駅には父と目加田先生・矢島先生・合山先生・安東先生がホームまで迎えにおられ、遅い日没、暖かい夜風と広軌の路面電車にも驚きました。その後、目加田先生の「退官に伴って教授に昇任し、日田の佐藤武朗様、阿部泰記先生、竹村先生はじめ優秀な学生さん達にも恵まれて、充実した研究生生活を送ったようです（写真⑭）。

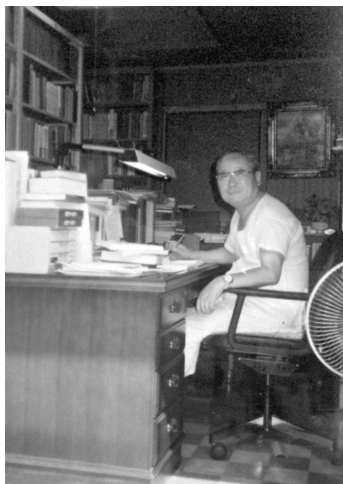
但し、昭和四十三年（一九六八）の九大大型計算機センターへのファントム戦闘機の墜落以後の大学紛争で生活は激変しました。それまでは自由に和服で出勤したり、研究室や担任となった一般学生の皆様と家族のように教官と学生が管理者と被管理者に別れてしまい、大学から笑顔が消えたようにも思いました。

九大定年後、久留米大学に奉職して文学部の設立にも関わりました。当時、私は名古屋市立保育短大で将来計画委員長として、名古屋市立三大学の統合計画に関わっておりました。父から煙草で燻された文学部設立申請書のコピーを送ってもらいました。人間科学科と国際文化学科で構成された文学部構想は斬新で、名古屋市立大学の新文科系学部はこの文学部構想で行こうと市役所に掛け合いましたが、仲介したコンサルタントから、文学部は基本的に哲・史・文の三学科構成で、久留米大学文学部の構想は学部長候補者の文部省での特異な説得によって生まれたもので、一般的ではないと却下されました。

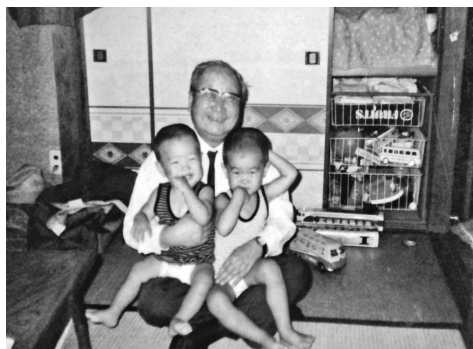
年を重ねていろいろな役職にも就きましたが、やはり、中国文学の研究生活が楽しかったらしく、充実した人生



写真⑯ 裏庭にて家族と



写真⑮ 書齋で仕事



写真⑰ 名古屋出張で孫と

を過ごせたようです。しかし、その影には母たつ子の生活面での献身的な支えがありました。まだ母は東区で暮らしており、私は当分は好きなように自由に生活して、何かあったら長男として支えるつもりであります（写真⑮、⑯、⑰）。

岡
村

穰